

シリーズ第32回

# 笛吹市探訪

## 武田氏と笛吹市⑨

武田氏の興亡を見つめてく 広厳院(一宮町)



広厳院本堂

清和源氏(せいわげんじ)の門である武田氏ですが、信玄の父である信虎が、甲斐国を統一して戦国大名としての権威を確立するまでは、苦難の連続でした。

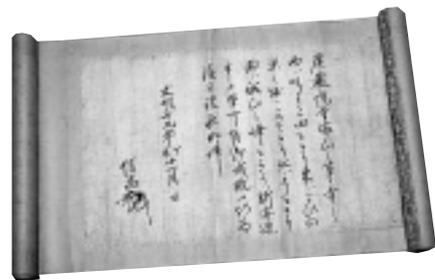
特に、応永24年(1417年)、武田氏第十三代の武田信満(のぶみつ)が、関東で起こった「上杉禅秀(ぜんしゅう)の乱」に關与して敗死すると、甲斐国内では武田氏の一族である八山氏・逸見(へみ)氏、守護代の跡部(あとべ)氏の他、中小様々な領主層が勢力を争うようになりしました。武田氏は甲斐守護に任命されながら、甲斐国に入国できないう状態が長く続きました。

康正(こうせい)元年(1455年)、武田信昌(のぶまさ)がわずか9歳で武田氏第十六代を継ぐ頃には、守護代の跡部明海(みょうかい)・景家(かげいえ)親子が勢力を誇っていました。信昌は寛正5年(1464年)に跡部明海が亡くなる

と攻勢に転じ、翌6年、跡部景家を小田野山(おだのやま)城(山梨市牧丘町)に滅亡させ、ようやく甲斐守護としての地位を確立することができました。

一宮町金沢の広厳院は、武田信昌と土地の豪族、塩田長者降矢対馬守(ふりやつしまのかみ)が、寛正元年(1460年)に建立した曹洞宗の名刹です。建立当初は跡部氏との抗争の最中でしたが、抗争に勝利した後の文明19年(1487年)に、信昌は新たに寺領を寄進しています。

広厳院には、この信昌の寄進状に始まり、信繩(のぶつな)・信直(のぶなお)(信虎)・晴信(信玄)・勝頼と、五代にわたる文書が残されています。年代は文明19年から天正5年(1577年)まで約100年に及び、僧侶たちの保護や寺領の寄進など、武田氏代々の当主たちが、厚い庇護を行って



武田信昌寄進状



武田勝頼寺領安堵状

きたことがうかがえます。

天正10年(1582年)3月11日、織田信長・徳川家康の連合軍に攻められた勝頼は大和村田野で自害し、武田氏は滅亡します。広厳院七世の拈橋(ねんきょう)和尚は、翌日現地を訪れ、勝頼主従の亡骸を集めて供養を行いました。

このように約100年間にわたって武田氏の崇敬を受け、その滅亡に際しては供養を行ったということで、広厳院はまさに武田氏の興亡を見つめてきたということができるでしょう。

広厳院には、その後も加藤光泰、浅野長継といった甲斐国の支配を任された大名たちの文書も残されており、戦国時代から江戸時代に至る甲斐国の支配の様子を知ることがができます。